

学校新聞「芥川」200号発行に寄せて

創刊二百号 記念号

校長 藤井 光正



写真はスイスの国旗です。1年間の留学を終えた生徒が、感謝の気持ちを込めてプレゼントしてくれました。フェアウェルパーティの様子は新聞「芥川」第195号に掲載されています。生物部が飼育していたウーパールーパーの里親を募集したのは第152号、応募してくれた小学生が満面の笑みで紙面を飾ったのは第159号でした。

新聞「芥川」は、まさに芥川高校の日常。それぞれの学校園では、生徒募集や保護者連携等を目的として、ホームページやパンフレットなど多様な媒体で広報活動を行っています。そんな中、芥川高校では、新聞「芥川」が広報活動の中核を担ってきました。各校で広報活動に対する考え方は様々だと思いますが、本校では、生徒の日常を切り取り、それをありのままに伝えることこそが最も誠実で効果的な広報活動であると考えています。この考え方は、平成17年のサッカード部全国大会出場を契機として自発的かつ自然発生的な形で生まれ、以来、新聞「芥川」を担当した多くの教員の努力により今日まで引き継がれてきました。長きにわたり、まるで血液のような温かさや力強さを持って脈々と受け継がれ、芥川高校の伝統となったのです。そして今、新聞「芥川」は、学校、家庭、地域が密接に連携し、生徒と教員が日々正面から真摯に向き合うという本校教育の原点を映し出す鏡となり、数え切れない人と人を強い絆で結びつけています。200号は通過点に過ぎませんが、これだけのボリュームの学校新聞を発行し続けることができたのは、本校を愛し、支え導いてくださった我々の先輩達と地域の皆様のおかげです。20年越しの夢を叶え悲願の全国制覇を果たした和太鼓部の記事は第196号。これを弾みとして、新聞「芥川」はさらなる充実をはかります。今後とも「愛読いただきませう」とよりよくお願いいたします。

座談会〜芥川新聞と地域交流を語る〜



「まずは、会長の方から、これ(学校新聞「芥川」)読んでいただいていますか?」

「PTAの役員会や実行委員会でも月1回は回っていますので、いつも見せていただいています。一番よく見るのは生徒が何をしているのか、特にここに載っています。クラブの勝った負けたや成績ですね。ここまで行ったか、がんばってるなあ」とか。PTA Aと言いましても生徒と接する機会がなかなかないので、(新聞を)見せていただけて非常にありがたいと思っています。」

「なるほど。地域版としても何号か、年間5回ぐらいですかね、出させていただいているんですけれども、何か自治会の方では反響とかありませんか?」

「そうですね。こうして学校や生徒さんに頑張ってもらうことで、保護者の皆さんの地域活動への理解が進めばいいと思います。そしてやっぱり地域に慣れてもらって1年、2、3回でも地域活動に参加してもらえたらありがたいです。新聞にも祭りのこととか、いろいろそういう地域活動を載せてもらって、地域の人たちが目的をもって学校に来ることができるようになればいいなと思います。」

「会長や地域の方の、さんにフラワーガーデンをすくきょいにしていただいています。これまで本気で荒れ地やったんですよ。それが一気にね、耕運機でやっていたらすくきょいになってきました。まあ、地域の方と我々も連携を、ということも考えております。ここは、浦富保育園の門を出たらすぐのところなので(浦富保育園とも)いろいろ連携もさせてもらって、これも掘りとかいろいろやらせてもらいましたけど、そんなところでうちのイメージみたいなところ、連携の在り方みたいなところをちよつと何かあればお願いします。」

「今フラワーガーデンの話が出たんですけど、お花摘みにもね。」

「あーそうですね。」

「1才、2才の子がみんなひまわり持って帰ってきて、ニコニコしてましたね。先日は体育祭があつて玉入れに出させていたんですけど、何でかなあと思つていたら、(毎年)芥川高校の2年生は保育園実習に全員が来てくださっているんですよね。その中で家庭科の選択科目を選んでいる人がさらに実習に来るといふことでその積み重ねが、あるから、ただ単に子ども可愛いというのだけではなくて、もう少し大きな意味で繋がりがあふれるんですね。なので、駐車場から登園してくるとも芥川高校生の自転車が通るんですけれども、そういうときで見知らぬ高校生やたら、(自転車で)シユンと行つてしまつたら、ちよつと気にかけて気遣つて通つてもらつたりするところがあるかなあという気がしますね。」

「なるほど。新聞にも(保育園の)子どもたちの笑顔がたくさん載っていますね。」

「いつもホームページで見せてもらつてホームページの新聞を印刷してホワイトボードに貼らせてもらっています。」

「せっかく地域の中にある芥川高校なんです、地域で高校生も育て、保育園の園児も育て、みんなを育てようという何かこう関係づくりができたらいいなと思います。」

「そうですね。」

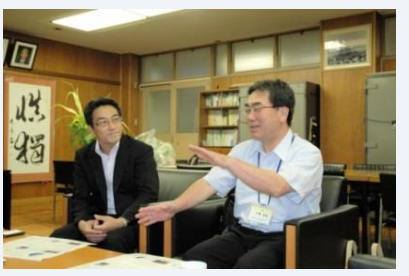
「地域みんなでもやろうと思つたら、やっぱり地域に溶け込んで何かこう催しものに一緒に参加するとかね、いきなり幼稚園はしんどいから小学校4、5年からとか中学校とかね、そういう交流でいろいろな地域活動ができるいいんですけれどね。」

「一つ僕思うのは、やっぱり防災ですね。学校の中で防災を考へても全く意味がない。地域の防災の活動をここでやつてもどうですか?避難訓練でも何でもいんやけど、そういうものに本校の生徒も参加できるという形を取つてもらうことができないかと思つています。」

「そろそろ時間もまいりましたので何か他に、例えば芥川高校にこんなことを注文ということがあれば一言ずついただけて締めくくりたいと思います。どうですか?」

「今も交流させていただいているので、やっぱり積み重ねやと思うのでこの交流を大事につなげていって、より幅広く子どもから、みんなまでごす中で共生社会、フレキシブルな社会をつくつていく人材を育てていきたいなあと思っています。」

「難しいけど、小学校と中学校とこと、年1回くらい学校関係の」



「活発な体育系と違って、文化系も去年のあの全国大会に行った書道部が行った書道ガールのパフォーマンス、おもしろいです。女の子が得意な所ですね、音楽に合わせて書を書くんですね。またそれが非常におもしろいんですけどね。和太鼓とかダンス部とは違いますが、他のクラブもそれこそ(地域の公民館とか)行つてですね、地域の方と将棋の対抗戦とか、です。地域のコミュニティのやり方はやり方次第ではいけらぬと思います。夏休みなら、今回もまあ、保育園に、書道に行くとかまあそういうのもね。」

「文化系クラブでしたら、高校生が地域の方に書を教えるつて言つたら変ですけどね。」

「むしろ教えてもらわなあかんのと違いますが(笑)」

「確かに教えてもらわないとあかんんですけど、そういう新しい書を若い人と(地域の方々で)交流するとか、まだまだ文化系の方もね、やりかたは多様にあると思います。」

「そうですね。」

「今、書と言いましたけど、美術、茶道もありませんから、いろいろと地域の方と共通の趣味というかですね、運動部以外にもできると思つています。」

「そういう交流、そういう運動とか、そういう関係から入つて自然に交流会みたいなになっていったらね。」

「で、どんな学校に来ていただいたらね、いいかなと思つてますけど、はい、ちよつとチャイム鳴りましたので、まともありませんがこれで終わりたいと思います。どうも今日はありがとうございました。」

全員「ありがとうございました。」

座談会出席者

